

# やまと 民俗への招待

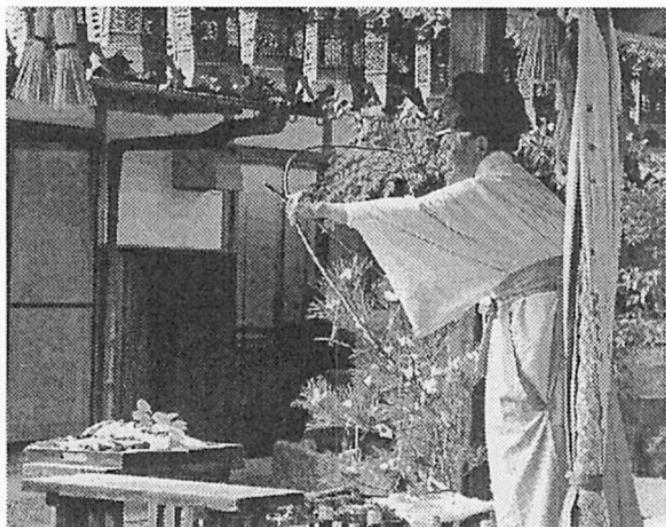
やまと 民俗への招待

鹿谷 熊

1月21日快晴の朝、奈良市奈良阪町の奈良豆比古神社を訪れた。参道には水が打たれ、空気は澄んで冷たい。20日から25日の間と決められた「始めが、この日行われる。境内の南東隅は炊事場となり、10人ほどの人が忙しく立ち働いている。同神社には、国指定重要無形民俗文化財に指定されている「翁舞」があり、翁講がこの芸能を伝えてきたが、これとは別に神事組織として「富座」がある。男子は富參りをしてくる。男子は富參りをして座に入り、45歳で初老、55歳で中老、60歳で老となる。老中になりたての1年目は見習、2年目は式司、3年目は奉行と

なる。この人々全体を奉行家と呼び、神社の神饌や直会の準備一切を取り仕切る。還暦となり、実質的な富座の一員になるにあたって、3年間は祭典や直会の準備をする慣習になっているわけだ。こうした方法は他でも見られる。柳生には十人衆という長老集団があり、ここに入ると「若い衆」として給仕役を務めなければならない。

次第に境内に老中などが参合し、10時半から祭典が始まった。献饌・祝詞の後、カンヌシ(社守)



拝殿から竹の矢を射るカンヌシの辰巳直三さん  
—奈良市で、筆者提供

## 神事務める奉行家

午前11時ごろから、境内の会所で一老の松岡嘉平治さん(97)らを正座に据え、老中一同が集まって直会が始まった。奉行家の最年長者である奉行頭、松岡浩治さんが年頭挨拶をし、新奉行や中老、初老になった人の披露がなされ、さらに今年から人数が足りない奉行家を補佐するために、祭

を放った。弓3本と矢3本は、富座の一老から三老に、残りの矢は老中授けられ、各家では魔除けとして、門口に挿しておく。

このあと、拝殿に置かれてあった「尉と姥」と「鮭」が、謡曲「高砂」の一節が謡われるなか、正座の長老に対して披露された。「尉と姥」は、雲脚の台に金銀の折り鶴を飾った松の枝を立て、その下に尉と姥の奈良人形を飾り付けてある。鮭は八足案に鮭2匹の切り身を1匹分に並べて大きくしたものだ。こうして奈良阪の富座行事は今年も始まった。奉行家人々は、この日、朝7時から集まって準備を始めたという。(奈良民俗文化研究所代表) ■隔週掲載